

第四項 大掃海具二號（對艦式大掃海要具）

本掃海具ハ二隻ノ驅逐艦又ハ之ニ準スル艦艇ヲ以テ曳船シ機雷ヲ拘捉曳航シテ對艦距離ノ約八割ノ水域ヲ清掃スルモノナリ

往時（大正三年頃）特別大掃海索ト稱セラレタルヲ大正五年大掃海具二號ト改稱シ今日ニ及ベリ

一、特別大掃海索採用迄ノ經過概要

- (一) 三十七、八年戰役中中佐廣瀬順太郎ハ三百噸乃至五百噸假裝砲艦ニ對艇ヲ使用シ當初掃海索トシテ纜鎖ヲ用ヒ索長ヲ二百米トシ（後、鋼索ニ改ム）兩端及中央ニ百斤「パラスト」ヲ附シタルモノヲ前記中掃海索ニ準シ構成セルモノヲ用ヒ相當ノ成績ヲ擧ゲタルハ斯種掃海具ノ嚆矢ト見ルベシ

(二) 武部式掃海具

(三) 三十七、八中戦役後半ニ於テ中佐武部岸郎ハ一種ノ三角帆ヲ意匠シテ之ヲ掃海索ノ兩端ニ附シ掃海索ノ沈下ト展開トヲ兼用セシム之レ武部式又ハ帆式掃海具ト稱スルモノニシテ大掃海具二號ノ鼻祖ナリ而シテ之ガ實驗ヲ小森瀛、艦載水雷艇、水雷艇ノ順序ニ施行シ成績見ルベキモノアリシモ別ニ拘提機雷處分具ヲ要ストノ理由ヲ以テ當時重要視サレザリシガ三十八年夏季第四驅逐隊(司令鈴木實太郎中佐)ニテ北韓地方清津等ノ急速掃海ニ際シ本掃海具ヲ使用セシガ索長二百米ニテハ艦ノ操縦ノ不便ヲ感シ之ヲ四百米ト爲シ尙浮標等ニ小改正ヲ加ヘタルニ良好ナル成績ヲ得タリ尙之ニ關スル所見トシテ掃海索ノ處々ニ鈎ヲ設ケ機雷ノ拘提ヲ確實ナラシムベキヲ提唱セリ

特別大掃海索ノ出生

既記武部式掃海索ニ拘提鈎ヲ附加シ其ノ他二、三ノ改造ヲ作セル特種掃海索ヲ作製シ大正元年十月海軍大演習ニ際シ二、三鎮守府ニテ實驗セシメ其ノ結果有望ナリシテ以テ之ガ構造ニ多少ノ改造ヲ加ヘ大正二年四月以來橫須賀ニ於テ數次ノ實驗ヲ重ネ尙廣ク各部隊ニ使用セシメ其ノ能力ヲ確メ置カントセル際大戰勃發セルヲ以テ不取致之ヲ兵器ニ採用セリ之ヲ特別大掃海索ト稱セリ前記大正元年使用ノモノニ比シ改良セル諸點左ノ如シ

一、掃海索ヲ三百米ヨリ五百米ニ延長シ掃海幅員ヲ大ナラシム

二、浮標及鐘量ヲ改良シ且其ノ數ヲ増加シ以テ掃海深度ヲ適宜ナラシメ且高速力曳航ニ堪ヘシム

三、掃海索及尾索ノ徑ヲ大ニシ切斷ヲ防グ

四、掃海索ニ附シアル鎗ヲ改良シ機雷ノ拘束ヲ確實ナラシム

(四) 大掃海具二號ノ採用


前記改良ヲ完成セルモノニシテ大正五年大掃海具二號ノ呼稱ノ下ニ兵器ニ採用ス

(五) 爾後ノ改良進歩ノ概要

- (1) 大正五年第八驅逐隊ニ於テ掃海索ノ右端左端ニ依ル作能ノ差異ヲ發見シ掃海索ノ構成ニ重大ナル懸據ヲ與フ
- (2) 大正五、六年展開帆及同附屬具、掃海索兩端ノ沈鐘ヲ廢止ス

浮標ハ全部魚形ニ改ム

- (一) 大正九年大掃海具二號甲制定
 - (二) 大正十年同 乙制定
 - (三) 大正十一年同 丙制定
 - (四) 同年 同 特制定
- 之等相異點別表ノ如シ

大掃海具二號甲	同 乙	同 丙	同 特	同 甲 (假稱)
大掃海具二號採用當時ノ 構成ニシテ(前記)其ノ特 徴左ノ如シ 一、掃海索全長五〇〇米 (五〇米十條) 二、各條(五〇米)ニ拘捉 錨四個宛ヲ装着ス 三、展開帆ヲ有ス(二個) 四、浮標ハ大小共  形ナリ	一、拘捉錨及展開帆 テ除ク 二、浮標ハ銀杏形ト ス 三、掃海索構成ハ右 擦左擦ヲ按排ス 右ノ外甲ニ準ズ	一、掃海索長ヲ 全長九〇〇米ト ス(五〇米一六 條) 二、浮標ハ魚形(縦 横鰭ヲ附ス)ト ス 右ノ外乙ニ準ズ	一、同上 全長一二〇〇米 トス(五〇米二 四條) 右ノ外丙ニ準ズ	一、同上 全長二四〇〇米 トス(五〇米四 十八條) 但掃海索ノ大サ チ小ニス (備考)本兵器ハ尙研 究中ニ屬スル 假稱ナリ